

保育学を求めて

～若手研究者のアイデンティティークライシス～

こついで

田代 和美

本企画シンポジウムは、企画および話題提供者である戸田雅美先生（鶴見大学女子短期大学部）のシンポジウムのサブタイトルについての説明から始まった。「若手研究者」とは、保育学の研究を自覚できない状況にいる、自分の研究が保育学なのかどうかをわからずに今だに保育学を求めている、そういう研究者としてのアイデンティティークライシスを抱えている研究者という意味である。

戸田先生は保育学の抱える問題について話題提供を行った。以下にそれをまとめて紹介する。

学問である限りにおいてはパラダイム（時代に共通の体系的想定）をもつはずだが、保育学のパラダイムがどのようなものなのかは分かりにくい。先輩の研究者の間にはそれが共有されているのかもしれないが、改めて意識化されたり、問題にされることがない。私たちが「若手研究者」でしかありえない理由はこのパラダイムが見

えにくいことにある。保育学のパラダイムが明らかでないことから生じる問題は、研究者としてのアイデンティティーを確立しにくいことに限らない。このことは他の分野と学際的な研究を成立させにくくさせ、また保育の実践にかかわる保育者を研究に参加させにくくしている。具体的に言えば、子どもを対象にすれば保育学なのだろうか。そうなると保育学は「子ども学」や「児童心理学」とどこが違うのだろうか。保育学にはそれらの分野が扱えない独自の対象があるだろう。また保育現場で生じる現象を事実として扱うのが保育学の研究だとすれば、「社会学」とどのように違うのだろうか。対象へのアプローチにも保育学独自のものがあるだろう。さらに保育実践に役立つことをもって研究としての妥当性を決めるわけにもいかない。そこで次のような保育学の学問的パラダイムを提示する。「保育学とは、子どもを『保育』しようとする者が、何をどうすべきかを選択し、決定する、その判断の根拠を検討する学問である」。ここで「保育」しようとする者とは、実際に

子どもと向かい合う保育者に限定されない。またこれは判断そのものの良し悪しを検討するのではない。また「保育」行為者自身が、自らの根拠を検討しなければならぬのではなく、外側にいる者が「保育」行為の判断の根拠を検討することができる。逆に言えば判断の根拠を検討する時は、どのような立場であっても、保育研究者でありうる。

このパラダイムに則ると保育学の学問的性格は次のようになる。「すべての学問的知識が保育学に必要なものになる。しかし、どの様な学問的知識であっても、それだけでは保育学的知識とはなり得ない。『保育』という行為に関する判断の根拠として関係づけられて考察されたときに、それらの知識は、保育学的に意味づけられる。」心理学的な発達研究や保育学の中の歴史研究、人物研究なども、それが保育行為の判断の根拠として検討されていなければ、保育学の研究にはなり得ない。逆に保育学の研究とは無関係のように思われる研究でも保育行為の判断の根拠として検討されるのであれば、保育

学の研究になりうる。

保育行為に関する判断の根拠とはどのようなものであるべきか、どのように検討されるべきかについては、具体的な知見の批判的な検討が積み重なる中で明らかにするだろう。

保育学の研究を展開していくためにはまず研究をこのような保育学的パラダイムに位置づけていくことからスタートし、そのパラダイムに則って議論し、批判的に検討されることが必要である。それによって保育理論のあり方や、保育学理論のあり方を厳しく問うようになっていくのではないだろうか。

指定討論者の柴崎正行先生（文部省）からの「保育学の構造をどのように考えようとしているのか、何が中心的な研究であり、何が保育者の参考となるような資料としての研究なのか。」という質問および司会の阿部明子先生（東京家政大学）からの「他の研究分野との対話を可能にするためには、何を考えればよいのか。」という質問に対しては、戸田先生の保育学以外の研究や今まで

の保育学の研究に対する考えが述べられた。

保育学以外の研究から得られた知見に関しては、その知見そのものの妥当性とそれを保育行為の根拠とすることの妥当性について考えること、保育の場において検討されるべき根拠との関係を問うことが必要である。また保育学の構造については、根拠を問いつづけ、それぞれの根拠の保育における意味や位置づけを問い続けることで、中心的課題が出てくるのかもしれないが、まず根拠を問うことを抜きにはできないと答えた。

「例えば歴史研究などの研究の保育における根拠としての位置づけを誰が行うのか。」という質問に対しては、第三者が、位置づけることはできないが、その研究者が自分の研究を保育学研究であると考えるならば、その位置づけを明示する必要があるだろうと答えた。

金沢妙子先生（金城学院大学短期大学部）は保育学における研究対象について話題提供を行った。その内容を以下に紹介する。

かつては、その時々の子どもに起こっている事柄に、実体があると考えていたために、自分の存在や子どもと自分の関係について言及せずに、子どもについて語っていた。子どもを向こう岸において語っていた。しかし保育の現場に通い続けるうちに、保育者が変わることによって子どもが全く異なる面を見せることに気づいた。保育においてはこれが正しいかわりだというような実体はなく、保育は主体である保育者と主体である子どもとの営みであり、その関係はプロセスとして開かれている。その意味でそれまでの自分の研究は、子どもについての研究ではあっても、保育の研究ではなかった。そして保育の研究であるためには、子どもと保育者の関係を問題にする必要がある、自分にとって保育学の研究対象は、子どもと保育者の関係そのものだという考えに至った。その関係を問うということは、その時々保育者の思い、考え、その関係を規定した保育者の側の根拠を問うことである。

次に、保育者の根拠を問う時の具体的な手がかりとし

て保育者の持つ枠組みを四つ提示して問題提起を行った。これは保育者が子どもとかわる際に、意識化・自覚化が不十分のままに関係を規定していると考えられる枠組みである。

「課題枠」：保育行為は意識する、しないにかかわらず何らかの方向性・意図性を含んでいる。この課題が、保育行為における判断の根拠になって、保育者と子どもとの関係を規定する。

「文化枠」：大人の持つ文化を検討する事なく子どもに押し付けてはいないだろうか。食事、立居振る舞いに關して、ごく当たり前と思っている価値観、先入観、社会通念を改めて検討課題としてみることを通して、相対化への道が開かれるのではないか。

「理論枠・知識枠」：保育者にはそれぞれの思考・態度・理論・知識があり、その枠組みで子どもを見、保育を見ている。その理論や知識を常に検討可能な状態にすることが求められる。

「からだ枠」：保育者のからだのあり様が言葉とは別

に子どもに様々なことを語りかける。その「からだ」のあり様を自覚化し、検討する必要があるのではないか。

このような保育者の枠組みは、その良し悪しを問うものではない。しかしこれを問わないと保育現象が見えにくくなる。枠組みを問うことは、自らのかわりの根拠を問う、あるいは、保育者のかかわりの根拠を第三者として問うことによって、検討の可能性を開くゆえに、保育学の研究対象になるのではないだろうかと述べた。

指定討論者の柴崎先生からの「枠組みは、固定的なものではないだろう。子どもとの対応の中や反省的に捉え直す過程で枠組みを変容させていくことが可能であるとすると、その変容のプロセスをどう作業化すれば、研究の対象になっていくのか」という質問に対しては、具体的な事例について話し合い、実践を問い直す中で枠組みを改めようとする変化が子どもの対応に表れ、そこで子どもからの対応も変化していくというプロセスを明らかにしていくことは、主要なテーマになるだろうが、保育カンファレンスのなかで実践を問い直し続けることによっ

て変わってきつつある自分の枠組みを自覚化しようとしているのが現状ではないかと答えた。

榎沢良彦先生（母子愛育会）は、自らの研究目的に



沿って用いている研究方法について話題提供を行った。

保育現場は集団の場であるが、しかし常に独自としての個人が問題になり、個人についての理解が重要な課題になる。独自性において子どもを理解することは、「その子の生きている世界を理解する」ことである。これは、一般的な法則を発見することとは異なり、そして子どもとの保育的関係を築く上で最も基礎的な問題になる。他にはいない自分がいかにいないこの子どもとどうかかわるか、つまり「実存同士のかかわり」は、保育者であろうとする人の切実な課題である。したがって、保育学は、実存的なかわりを基礎にして展開される保育の構造や子どもの発達、そしてそのかわりを取り巻き支えている多様な契機を明らかにしなければならない。

自分自身の関心は、現場に入ってそこに生きることによって、一保育者としての実存的な問題を自分なりにつかみ、個々の子どもをその独自性において理解することである。そのために必然的に保育実践を行うこととなる。そして実践をした後に記録をする。すなわち自分の

体験を反省し、想起することによって実践中には無自覚であったことを自覚的にしていく。このような実践と記録の繰り返しの中で、個々の子どもの理解が深まると共に個的な存在を越えた本質の把握が行われる。個的な理解が本質の把握につながるという点については、個々の物や出来事をしっかりと認識することは、同時にその本質を捉えていることであり、日常的な体験の中で私たちはこれを常に無自覚的に経験している。それを自覚的に行うのが自分の研究方法である。そして個人をより豊かに理解するためには、個人の背景、その子どもの生の連関や意味の連関の中に入っていくことになる。それゆえに自分は必然的に事例研究を行うことになる。事例研究は二次的な研究のように扱われてきたが、これまで述べてきたような観点に立てば、それだけで固有の価値を持つ。ただ一つの事例をよりよく理解することを通して、本質的なものの把握が可能になると考えるし、それを私たちは経験的に知っている。

さらに自分の研究を他の人に伝えるためには、自分自

身の関心のあり方や自分と子どもとの関係を明らかにすることを通して、自分の認識の基盤を問い直すと共に他の人と共有化できるように努めているという研究方法のプロセスについて話題提供がなされた。

指定討論者の柴崎先生からの「事例研究としてまとめていく上で、多くの人が読んで納得できる様な事例にするためには、どのような作業が必要か」という質問に対しては、自分の理解を繰り返し実践の中で確かめ、本質だと思ったものも何度も現実と対応させて検討を続ける。また研究の過程で他の人と対話をして確かめることを行っている。この二つの対話によって自信を持って本質的であるといえるものを事例研究としてまとめていくと述べた。

指定討論者の柴崎先生の発言は、まとめると以下のようなものであった。

子どもと保育者の関係の中の問題は、保育学の中心的な課題として捉えてよいだろう。しかし実際の保育は、

子どもと環境の関係や子ども同士の関係、保育者同士の関係など全てのことの影響されながら展開されている。したがって保育者と子どもとの関係が、その中心にあるにしても、ほかにもいろいろな問題があるというように広げておきたい。

保育とは何か、保育の中で大事にされること、中心的な問題は何で、それをどう考えればよいのかを自分なりに明確にし、またそれが多くの人と共有できるものでありたい。そのために保育とは何かを見直すと、保育を構成する要素には、保育者と子ども、保育者と子どもを取り巻く環境がある。この三つの要素が重なりあった部分が保育ではないか。捉え方によってはいかようにもこの中の二つを取り出して考えることはできる。またこれらの重なりあった部分は状況によって様々に変化する。しかし様々に変化する中でも大切なことはなにか。これを検討することが保育学の中心課題ではないか。

また文化や社会の様に、保育を構成する要素を取り巻くもっと大きなものもある。あるいはこれらの要素のう

ち、子どもだけ、保育者だけ、環境だけを捉える視点もあるだろう。これらの研究は保育学の中心的な研究ではないが、保育を考えるとときに必ずかかわってくる研究というように捉えられないだろうか。

保育の構造の中で、保育を取り巻く様々なものがあって、いったいどこがどのよう研究されているのか、中心となる部分はどこまで研究されてきたのかということ、保育学をめざす人々が十分に議論をし、整理していくことが必要であろう。これを時間的な流れの中においてみると、歴史研究の意味も出てくるのではないだろうか。

また最終的にはひとりひとりの子どもにとってプラスになる様なものを目指すという視点をもつという共通理解が必要ではないかということが述べられた。

司会の阿部先生は、今回のシンポジウムの司会を依頼されて引き受けるまでに考えられたことについて、保育学会の歴史的な経緯と関係づけながら述べられた。

人間としての育ちの過程を見通し、人間そのものをどう見とっていかということの学問的体系に関しては、難しいということもあるが、全くといってよいほど検討されてこなかったという経緯がある。しかし保育や子どもについて研究することは、つまり人間を研究することである。人間は多種多様な面をもっているから、私たちがこのようにいろいろな角度から、自分の研究の方法を提示した上で、悩みつつも語り合うことで、交流していくことは、学会としての一つの役割ではないか。

そしてチームを組んだり、あるいは相互に話し合っていくことで、子どもの読み取りの単純化や一面化の危険性を防いでいくことが大切だろう。そのような相互に話し合う雰囲気但至少でも残っていけば、このシンポジウムの意味があったといえるのではないかと、まとめがなされた。

*

シンポジウムを終えて

保育者と子どもの関係は保育学の研究の中心ではある

が全てではない。研究の対象は多岐に渡って当然であるし、また何を研究するかによって研究の方法も様々にあつて当然である。このシンポジウムは保育学をある特定の研究だけに限定することを意図したのではない。保育を研究する上で、研究としては何をどのように共有していけば相互に討議しあい、積み重なりを持っていけるのかを考えたかったのである。

新参者の私自身は、保育の世界および保育学に入ってきたのだが、果して入っていけるのか、どこから保育学の研究に入っていったらよいのか、その入口が見つけられずにいた。保育を臨床として捉えたいのだが、しかしいわゆる一対一の臨床とイコールではないことは自覚できても、では何をどうすれば保育を臨床的に捉えられるのがわからずにアイデンティティークライシスを持っていた。そのためにこのシンポジウムの企画に参加させていただいた。保育の現場にいるときに常に個々の子どもを見てはいるが、全体としての保育の動きが見えないというジレンマを私自身はもっている。個を対象と

した臨床に対して、個だけではなく集団の動きや集団の育ちをも視点に入れて、常に動く保育の場。子どもだけでなく保育という営みそのものを、生きている対象として捉えるためには、保育そのものの構造を捉えることが私自身にとっては欠かせない。それは保育学の構造にもつながる問題である。この点については、今回のシンポジウムでかなり明確になったように思われる。

その上で、これからはそのどこに自分の研究が位置づくのか、それがどういうところで保育学なのかを、戸田先生が述べたパラダイムとの対応から考えていきたい。そしてまた直接的であれ、間接的であれ子どもの育ちはどう返せるのか、この点だけは、常に考えながら研究をしていきたいとシンポジウムを終えて思いを新たにしている。

(お茶の水女子大学)